

検索は知的生産力を鍛えるか？

■私の「知的生産術」の磨き方

情報時代のいま、情報を吸いよせ、日常的に使いこなす。つまり、情報をもとに「読む・書く・話す」力をいかにしてモノにするかで、その人の知的パワーが測られる。パソコンに向かってキーワードを二つ、三つ打ち込み、検索をかければ、すぐにそのキーワードに関する情報がざあーっと出てくる。そこからまたリンクする先をたどれば、次々に情報が得られ、無量無辺といつてよいほどに広がっていく。英語ができれば、さらに世界中の情報が検索できる。この検索をもって、情報をフル活用していると思ひ込んでいる人がなんと多いことか。

実は、私自身は検索をまったく行なわない。検索機能はたしかに便利だと思うが、正直に言えば、ネット検索に時間を使うのはもったいない。検索することは、一見、

「読む・書く・話す」も

一瞬でモノに

する技術。

斎藤孝

情報を駆使しているように思えるが、検索すればするほど、本を読むとか、企画をまとめるというような知的生産力は反比例して衰えてしまうと感じているからだ。

「万有引力」の発見など、輝かしい功績をあげたニュートンは、彼自身にいわせると、その生涯は、「海辺で遊んでいる少年のようなものだったにすぎない」そうだ。ニュートンは、海辺で遊びながら「ときたま、美しくなめらかな小石やもっと美しい貝を見つけて自ら楽しんでいただけだった」といつている。

私の前にも、そして、だれの前にも、真理の大海は洋々とした広がりを見せている。私も小さな石ぐらひは拾ってみたい。そのためには、水平的に外部の情報を移動していくのではなく、垂直的に壁を突破していく集中が必要となる。

私は、いま『論語』を訳している。喫茶店で数ページずつ、孔子に向き合い、自分の言葉にしながら理解を進めている。孔子はネットを使わず人類最高の叡智に達した。孔子の話聞く静かな時間は、情報検索のザワザワした時間とは対照的に、自分の奥の種を発芽させてくれる気がする。

自分は学者ではないから、という人もいるだろう。だが、自分の考えや感じ方など、自分自身の世界を持つことはこのうえなく楽しいことだ。それが現実には生かされ、仕事や研究の成果として価値を持ったら、こたえられないほどの爽快感、達成感を味わえる。せつかくこの世に生まれて、そんな喜びと無縁に終わるのは、いかにももったいない。

■ まずは、自分の頭の中を検索せよ

勉強や研究は、検索的な作業をベースに自分の考えをまとめていく作業だといえる。最初に、「私は検索しない」と書いたが、私が行なわないのはいわゆるデジタル検索、インターネット検索のことだ。

実をいえば、私は、かなりの時間を検索に充てている。「読む・書く・話す」ときに私が、行なう検索は、自分の頭の中の検索、いわば自己検索である。

パソコンの検索に比べるとずっと原始的な方法かもしれないが、それまでに発表された論文や本などを読み、そこから自分の研究をまとめるのに必要な要素をひきだして記憶しておく。

論文を書く。本を書く。いや、もっと軽いエッセイを書くような場合にも自分の頭の中に蓄えた情報を検索し、次なる考察へのヒントや支柱の一つとして活用している。

たまたま書くことを例にあげたが、ものを考えたり、話す場合もまったく同じだ。

何かの企画を考えようというとき、まっ白な状態から考えをスタートさせるのは大変だ。だが、頭の中を検索して、考えようとしているテーマに関わる記憶、つまり情報をひきだし、それを手がかりに考えを進めていくと、速く、的を射た考えをまとめることができる。

頭がよいとは、こうした作業を速く、的確にできることをいうのではないか。言い換えれば、頭がよく働くとは自分の中の情報の使い方がうまいことをいうのである。

■ コピペしただけの情報に価値はない

ネット情報を検索して簡単にひっぱりだす。これに慣れてしまうと、自分に必要な情報を感知して探し出すというセンサー機能が働かなくなってしまう。

頭の働きを徹底的に悪くするのがコピペである。コピペとは、検索して見つけたネット情報をそのままコピペしてペーストする（貼り付ける）作業のことだ。

たとえば、「学ぶとはどういうことか」という課題で、自分なりの定義・考察をしなさいという課題を与えたでしょう。

ある頃から、学生が提出したレポートを読み進めていくと、突然、文体も文脈も異なる文章が出てくるようになった。そのうえ、まったく同じ文章がほかの学生のレポートにも登場する。

なぜ、こんな奇妙なことが起こるのか。課題をキーワードで検索し、出てきた情報のうち、「これでまあいいか」というものをコピペして、レポートにまとめてしまうという学生が珍しくなくなったからである。

レポートをまとめるとき、インターネット登場以前の学生は、多少の文献を読み、その中から使える情報をひきだし、それらを組み合わせ、新たに自分の考えを加えてレポートを書いたものだ。他人の情報を参考にする場合には、多少のアレンジを加えていた。かろうじて自分は投影されていた。

ところが、インターネット登場後の学生は、検索して、コピペをしてレポートを完成させたつもりになりやすい。これでは、情報に触れ、レポートをまとめることが頭を鍛える機会になっていない。

研究は、先人の轍^{わだち}をたどることからスタートすることが多い。だから、これまでも先人の言葉や研究成果を引用することはあった。だが、それはあくまでも引用であり、

鉤かぎかつこをつけ、出典を明記することがルールだった。

最近では、他人が獲得した情報を地の文、つまり、自分が考え、書いた文章であるかのように使ってしまう。

これははっきりいって、盗作だ。知的所有権が認められているのだから、犯罪行為だといわれても弁明の余地はないだろう。

レポートに使うぐらい、いいじゃないか、というようなことではない。自分の考えていることと人の考えたことをはっきりと区別して、そのズレや一致から意味を見出すことが大事なのだということを、すっかり忘れていたのである。

■ タクシーでは足腰は鍛えられない

足腰を鍛えるために、「一〇キロ先の山の麓ふもとまで往復してくるように」という課題を与えられたでしょう。

自分で文献を読み、どこが役立つかを見つけ、それを参考にしながら自分でレポートを書く。これは実際に走るなり、歩くなりして一〇キロ先の山の麓まで往復してきたことにあたり、それなりに足腰は鍛えられる。

だが、ネット検索をしてコピーでレポートを仕上げた人は、タクシーを使って往復してきたのと同じことになる。往復はしてきたけれど、足腰を鍛える、つまり、頭の働きを鍛えるという本来の目的はまったく達成されていない。

これが情報活用だと思い込み、こんなことを繰り返しているのでは、毎週レポートを書いて提出しても、自分の思考はいつこうに鍛えられないし、何十通、何百通の企画書を書いたところで企画力は磨かれない。

情報ソースやコンテンツはふんだんにあふれている時代なのだ。その情報を、自分のモノにし、自分の頭を鍛える形で使いこなす方向をめざしてほしい。

検索やコピーを情報活用だと思い込んで、盗作どさくを続けていると、その報いはちゃんと自分に返ってくる。

頭の働きが鍛えられないこともその一つだが、小石を拾ったり、美しい貝を見つけるといふ喜びにまったく出会えなくなってしまう。

自分なりの気づきやものごとを切り取る新たな角度を発見したという喜びは永遠に味わえない。自分で海岸を歩かなければ、美しい貝は拾えないのだ。これほど強烈なしっぺ返しがあるだろうか。

■ 記憶がなければ何も生まれない

自分は研究者ではない、研究者をめざしているわけではない、という人もいるかもしれない。だが、どんな生き方であれ、仕事であれ、求められるのはその人らしい力を発揮し、新たな価値をつくり出していくことだ。

成果や利益は、つねに新しいアイデアや工夫によって生み出されるものだ。独創性や創意工夫。その基盤になるのが、それまでその人の中に蓄積された情報だ。

蓄積された情報とは、記憶されている情報、簡単にいえば記憶である。この記憶はテストのための暗記ではなく、その人が関心を持っていることや、その人の仕事に関わる記憶など、その人がひきよせ、吸収した、その人ならではのフィルターを通した記憶をいう。

その記憶は活用できるものであることも重要だ。情報にせよ、記憶にせよ、活用できなければそんなものはなきに等しい。活用できない情報ならば、あるだけじやまだ。情報を活用するとは、情報を、「読む・書く・話す」など必要なときにいつでもひきだせるように記憶しておくこと。必要なときに使える形で記憶しておくことをいう。

それを一人ひとりが行なうことにも大きな意味がある。そこに独自性が生まれる可能性があるからだ。

新たな価値は、それまでの情報に、それまでなかった角度の光があてられたり、それまでなかった組み合わせから見出されるものである。

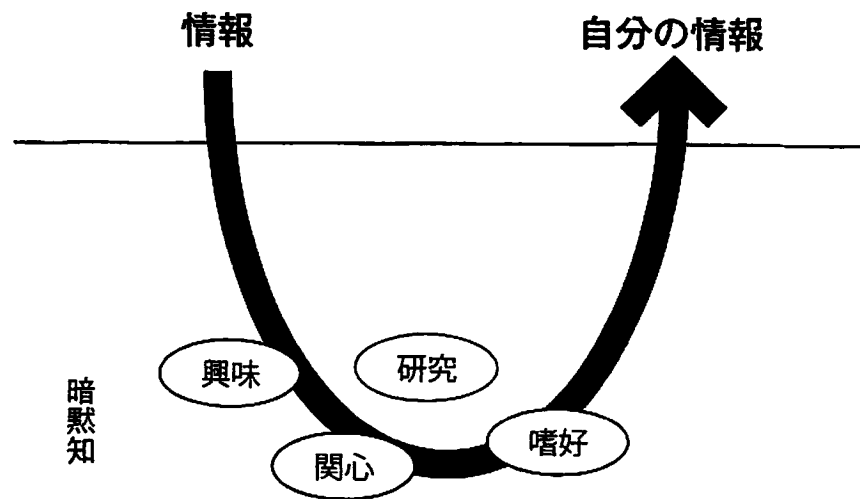
無からは何も生まれないように、創造性も記憶ゼロからは生まれない。

新たな角度を見出す。あるいは、それまでなかった組み合わせを見出すのは、人間でなければできないことだ。パソコンはいうまでもなく、スーパーコンピュータであっても、人工知能ではそれはできない。

■ 自分をくぐらせる

最近は人間力などという言葉も使われるようになり、企画でも営業でも、あるいは生産現場でも、その人でなければできないことが加えられた仕事が高く評価される。

反対にいえば、その人らしさが感じられない、あるいは、その人らしさが求められない仕事ならば、やがてはロボットに置き換えられていってしまうことになるだろう。



【暗黙知にくぐらせ、情報を自分化するイメージ】

が肝要なのだ。そうした活用の基本になる情報の記憶は、自分をくぐらせて記憶したものでなければダメだ。

自分をくぐらせるとは、自分の暗黙知にいったん深く浸すような感覚をいう。暗黙知とは、経験的な知の集積とでもいうべきもので、知識や研究の積み重ねである場合もあれば、興味・関心・嗜好といったものである場合もある。別の言葉でいえば、自分だけの世界といえる。「これー」という情報に出会ったならば、その情報を一度、自分の世界に浸すようなイメージ。手にした布を水に浸すような感覚をイメージしてもらえば、なんとなくわかっていただけたと思う。井戸の

奥深くに湧く水にまで届く感覚があれば、自分の暗黙知を活用できているといえる。

ぜひ、くぐらせる感覚をつかんでほしい。情報に出会ったとき、一度、自分をくぐらせておくと、その情報が自分のものになった、という感覚が生まれやすくなる。よく、心の琴線に触れるという。はたして情報が心の琴線に触れる感覚を経験したことがあるだろうか。

そういう感覚があれば、その情報は、深く自分をくぐらせたといえ、のちのち、自分にたくさんのヒントを与えてくれる情報になっていく。情報を吸収するその段階から、しっかり自分を関わらせていくのが、「知的生産」の第一歩なのである。

■ 頭をよくする情報活用法

本と出会う。人と出会う。あるいは会議で何かのアイデアと出会う。こうした出会いで得た情報を、自分のフィルターを通して記憶しておく、それが積み重なって、しだいに自分の思考や発想のベースを形成していき、「読む・書く・話す」力の土台になる。

自己検索をかけるとは、何かを考えようとするとき、こうして蓄積された自分の中

の情報の記憶を探り、新しい考えやアイディアに生かせるものをひきだす作業をいう。
知的生産術を磨くためには、なによりもまず、自分のデータベースをしっかりと積み上げていくような情報収集をしていかなければならない。

こうして積み重ねていった自分自身に検索をかける。これを毎日行なっていけば自己検索機能が鍛えられ、頭の働きはどんどんよくなっていくはずだ。

よく、学校の勉強は得意ではなかったが、社会に出てから、ぐんと頭角を現す人がある。こうした人は、学校時代の勉強には興味を持てなかったために頭を使おうとしなかった。だが、仕事をはじめたら、興味の持てることに出会い、その興味から関心の持てることがどんどん増えていった。こうして、関心事をしょっちゅう考えるようになり、自己検索を繰り返すうちに頭の働きのよくなっていったのだと考えられる。

よく知られているように、人の身体機能は使わないと一気に衰える。頭の働きも同じだ。パソコンの検索ばかりを繰り返しているうちに、自分の頭の中を検索するという機能が一気に衰えてしまう。

大事なこと、必要なこともネットに頼る。これでは気もゆるむ。「大事なことは自分の内側にある」と自負する緊張感が、頭を動かす。

情報の時代というならば、なによりもまず、自分自身をもっと情報化しなければいけない。

自分の頭や感性を鍛えながら、高密度の情報データベースを自分の頭の中につくる。それをどんどんひきだし、自分でなければできない考えをまとめる。

それができる人がどんどん増えていく。一人ひとりの、そうした自己検索能力がどんどん高まっていく。私は、そうなったときにはじめて、本当に価値のある情報の時代になったといえるのだと考えている。